

# みの EDO

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会  
TEL 0572-43-2141  
発信：多治見市・笠原町東京情報局  
TEL 03-5225-6863

## “LIXIL 資料館オープン” ～ LIXIL に統合した各社の歴史を重んじ、未来へ活かす資料館に～



LIXIL WING ビル外観



インフォメーションゾーン（映像は藤森社長）

住まいと暮らしの総合住生活企業である株式会社 LIXIL（本社：東京都千代田区、社長：藤森義明）は、このほど LIXIL のオフィス拠点として再構築した「LIXIL WING ビル（東京都江東区）」のリニューアルに伴い、LIXIL に統合した各社の創業時からの史料などを展示した「LIXIL 資料館」を 10 月 1 日に開設オープンした。その概要をご紹介します。

LIXIL は、日本の住生活の向上に深く関わってきたトステム、INAX、新日軽、サンウエーブ工業、東洋エクステリアの 5 社が 2011 年 4 月に統合して誕生した。

今回開設された「LIXIL 資料館」は、統合した各社ならびにグループ各社の“それぞれの歴史を重んじ、見つめ直すことにより、未来への歩みに活かしたい”という思いを込め、グループ社員の相互理解・情報共有、そしてコミュニケーションの場として活用していくとともに、社外の方にも LIXIL を深く理解していただく場として運営していくとしている。

館内は、「インフォメーション」「ミュージアム」「ライ

ブラリー」の三つのゾーンで構成される。

インフォメーションゾーンでは、LIXIL の紹介映像やグループ各社のパンフレットを展示する他、国内外の主要拠点も紹介している。ミュージアムゾーンは、常設展示として日本の住まいの変遷を紹介した大年表と、統合した 5 社およびグループ会社の川島織物セルコン、Permasteelisa の歴史・文化などをそれぞれのコーナーで紹介するほか、LIXIL グループに関連するさまざまなテーマの企画展を行なうコーナーも設けられている。ライブラリーゾーンは、LIXIL グループ各社で保管していた書籍、雑誌や LIXIL グループ出版物および最新住宅関連書籍が閲覧できる。また、LIXIL グループの商材が採用されているプロジェクト物件の写真も展示される。

### LIXIL WING ビルの再構築と LIXIL 資料館の開館

オープン当日には報道関係向け見学会が開催され、LIXIL WING ビルの再構築と LIXIL 資料館の開館について次の各位から説明があった。その概要を要約してレポートする。

株式会社 LIXIL 取締役副社長執行役員 人事総務・法務担当 八木 洋介氏

株式会社 LIXIL 常務執行役員 広報・宣伝担当 松村 はるみ氏

株式会社 LIXIL 「LIXIL 資料館」館長 晝間 幸雄氏

#### 「笠原セミナー」開催

開催日時：平成 24 年 12 月 17 日（月）午後 7 時～  
場 所：笠原中央公民館 3 階視聴覚室  
講 師：東京理科大学准教授 博士 今本啓一様  
タイトル：軍艦島構造物の劣化調査とタイルの躯体保護効果



取締役副社長・八木氏



常務執行役員・松村氏



館長・晝間氏

## LIXIL WING ビルの再構築と新たな展開

### 取締役副社長・八木氏から

LIXIL WING ビルは、長くトステム大島ビル（本社・ショールーム）として親しまれてきたが、この8月にLIXIL ショールーム東京のオープンに伴い、名称も機能も新しくしようと名称の社内公募を実施し、ビルの独特な形状から「LIXIL WING ビル風」（金属・建材カンパニー本部）と「LIXIL WING ビル光」（住設・建材カンパニー本部）と名付け、「LIXIL VALUE」を実現するオフィスとしてリニューアルすることとした。“WING”には空高く舞い上がる上昇のイメージがあり、活力のある世界一の総合住生活企業をめざすLIXIL にふさわしいと思う。

### LIXIL 資料館 開設の目的

#### 常務執行役員・松村氏から

LIXIL WING ビルの再構築と新たな展開を図っていくなかで、その中心部分を担う施設として2階フロアにLIXIL 資料館を開設した。その目的を一言で表せば、「温故知新」。

歴史のある5つの会社が統合して一つの会社LIXIL になるという壮大な試みがスタートしたその時から、各社それぞれの企業風土、経営哲学、財産などを継承しながら、新たな価値実現を共有するために、この資料館構想も始まった。各社の広報スタッフを中心にプロジェクトを立ち上げ、各社の経営者にインタビューし各種資料を整理、LIXIL の新たな本拠地となるLIXIL WING ビル内に開設の運びとなった。将来的にはLIXIL グループとしての総合

的なアーカイブセンターとして発展させていきたい。

LIXIL 資料館 開設のテーマである「温故知新」とは、次の二つに集約される。

- ①LIXIL に統合した各社およびグループ会社の歴史・文化・フィロソフィーに学び、自己理解・相互理解の場、信頼を培う場とする。
- ②豊富な専門図書・技術資料・グループ各社の企業文献とナレッジ共有により、社員が未来の住生活に向けた創造性を養う場とする。

### LIXIL 資料館 構成と施設概要

館長・晝間氏からは、LIXIL 資料館の館内の構成、施設の概要について説明があり（後記）、最後に「LIXIL の過去に学び、未来に向かう『LIXIL 資料館』をどうぞゆっくりご覧ください」と結んで説明会を終了した。

#### ■「LIXIL 資料館」の構成

[インフォメーションゾーン]

LIXIL の紹介映像とLIXIL グループ各社のパンフレットを見ることができる。また、国内外の主要拠点の紹介もしている。

[ミュージアムゾーン（常設展示）]

##### ①住生活の変遷

明治初期から2011年のLIXIL 誕生に至るまでを5つの時代に区切り、住生活の変遷と併せて、新たな時代を切り拓き住生活に変化をもたらしてきた各社の商品を紹介する。



ミュージアムゾーン〈ブランドストーリー〉



ライブラリーゾーン



ミュージアムゾーン 〈住生活の変遷〉



ミュージアムゾーン 〈住生活の変遷〉  
伊奈製陶 創業時代の土管、帝国ホテルの  
スクラッチタイルなど



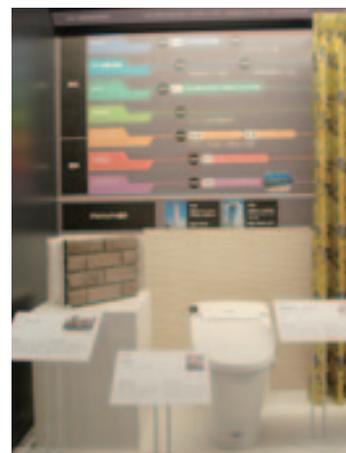
ミュージアムゾーン 〈住生活の変遷〉  
木箱に梱包されたモザイクタイル



ミュージアムゾーン 〈住生活の変遷〉  
INAX 日本初のシャワートイレ  
サニタリイナ 61



ミュージアムゾーン 〈住生活の変遷〉  
外壁タイル ベルパーチ工法など



ミュージアムゾーン 〈住生活の変遷〉  
INAX の T-ブロック、  
サティス、エコカラット



ミュージアムゾーン 〈ブランドストーリー〉  
中央テラコッタは 1934 年竣工の旧特許庁庁舎



ミュージアムゾーン 〈ブランドストーリー〉  
INAX コーナー

## ②ブランドストーリー

各社の歴史と併せて、創業の精神・企業理念・技術革新の変遷などを、それぞれのコーナーで紹介する。

### 〔ライブラリーゾーン〕

LIXIL グループ各社にて保管していた書籍、雑誌や LIXIL グループ出版物および最新住宅関連書籍の閲覧ができるほか、LIXIL グループの商材が採用されているプロジェクト物件の写真を展示。

## ■「LIXIL 資料館」の概要

【所在地】東京都江東区大島二丁目1番1号 LIXIL WING ビル

【電話番号】03-3638-6276

【開館時間】月～金 10:00～17:00 (土日、祝日、会社休日は休館)

【入場料】無料

【見学申込】電話による事前予約制

【施設面積】約 1,400㎡ (ミュージアム約 510㎡、ライブラリー約 500㎡)

【交通】[電車] 都営新宿線 / 東京メトロ半蔵門線 住吉駅 A3 出口より、徒歩約 5 分 / 都営新宿線 西大島駅 A2 出口より、徒歩約 5 分

[バス] JR 錦糸町駅南口より、都営バスで約 5 分 (4 番のりば 錦 28 東大島行「大島 2 丁目」下車、0 分)

【ホームページ】<http://www.lixil.co.jp/corporate/csr/culture/shiryokan.htm>

# 東京駅丸の内駅舎の保存・復原に (株)LIXILの化粧煉瓦（通称・赤煉瓦）を採用

～煉瓦一つひとつが持つ独特な色のばつきや、創建当時の製造技術、状況を再現～



完成した東京駅丸の内駅舎 全景

住まいと暮らしの総合住生活企業(株)LIXILは、国指定重要文化財である東京駅丸の内駅舎の保存・復原工事（事業主：東日本旅客鉄道株式会社）において、東京駅の象徴的な化粧煉瓦※1（通称：赤煉瓦）の再現に成功し、戦災により焼失した南北のドーム部分を含む3階部分の外壁（化粧煉瓦約50万枚）として採用された。

1914（大正3）年、建築家の辰野金吾の設計によって創建された東京駅丸の内駅舎は、明治から大正期の洋風建築を代表する赤煉瓦の建物として知られ、南北にドームを配したその壮麗な姿は、首都東京の玄関口を象徴してきた。1945（昭和20）年、戦災によって南北のドームを含む3階部分を焼失し、戦後は2階建ての建築として、最近まで親しまれているような姿になった。

LIXILでは、これまでに培ってきたやきものづくりの経験と、蓄積されたノウハウを駆使し、現存する1、2階部分と違和感なく調和する赤い化粧煉瓦の製造に挑戦。製造協力工場として、これまでもLIXILと共に数々の歴史的建造物の復原に積極的に取り組んできた実績を持つタイルメーカー(株)アカイタイル（本社：愛知県常滑市、社長：赤井祐仁）をパートナーとし、2003年から試作を重ね、2010年の本生産が開始されるまで7年間も試行錯誤を繰り返し、試作品だけでも15,000枚を超える一大プロジェクトとして復原に取り組んできた。

## 東京駅丸の内駅舎化粧煉瓦復原について

東京駅丸の内駅舎の外装を彩る化粧煉瓦の赤い色合いは、まさに首都、東京の玄関口である東京駅を象徴するもの。創建当時、化粧煉瓦の製造にメーカー5社が関わっており、原料や窯の焼成温度など生産条件の違いから、同じ赤い化粧煉瓦でも、その色合いは必然的にばらついている。しかし、窯業技術の進歩した現代においては、色のばらつきを敢えて再現することは難しく、そのため生産条件を見つけることが最大の課題となった。

LIXILでは、現存する創建当時の化粧煉瓦と違和感なく張り合せ、建築の外観を再現するために、7年間もの時間を要して化粧煉瓦の試作を重ねてきた。

## ■最も苦勞した、色とばらつきの再現

### ・基本色（赤色）の再現

#### 原料の確保

創建時の化粧煉瓦の主原料と同じ、知多半島産の赤土を使用することを最初に決定したが、天然の原料であるために、採掘場所や採掘時期によって成分に違いが生じ、焼成した色合いも大きくばらつくことが予測された。そのため、見本品で採用が決まったとしても、本生産の時に同じ色合いを再現することは難しいため、本生産用の赤土100tを確保したうえで、見本品の制作を実施した。焼成する窯の条件設定

現在のタイルの一般的な焼成温度（1,200℃～1,250℃）では、求める「明るい赤色」の再現ができないため、当

※1：化粧煉瓦と外装タイル：明治～大正にみられる煉瓦造建築で、躯体となる煉瓦の壁を装飾するために、その上に張り付けた薄い煉瓦を「化粧煉瓦」と呼ぶ。後に普及した、鉄筋コンクリート造の建築躯体に張り付ける「タイル」と、製法や用途が同じであることから、大正11年に「タイル」という呼称に統一された。



東京駅丸の内駅舎 正面外観

時の焼成温度（1,000℃～1,100℃）で焼成する、専用の焼成条件を整える必要があった。生産窯のひとつを、この化粧煉瓦専用にしてしまうことは、メーカーとして非常に大きなリスクを負うことになるが、それに取って挑戦する英断をしたのが、歴史的建築物のタイルの復元に実績を持つアカイタイルだった。

#### ・色合いの“ばらつき”再現

創建当時の化粧煉瓦の色合いのばらつきは、生産工場の違いや原料の採取条件の違い、石炭窯による焼成温度の違い等によって必然的に生じるもので、厳しい管理基準のもとで均質な色合いの煉瓦生産に努めても、合格率は40%程度だったと記録されている。

格段に進歩した現代の窯では、色合いのばらつきは当時に比べはるかに小さくなっているため、今回の復原では、生産条件をコントロールし、取ってばらつきをつくらなければならない。試作では、このコントロールの条件を見つけ出すことが大きな課題となった。焼成する条件と原料の調合を少しずつ変えながら、試作を繰り返し、見本制作したタイルは全てその色合を測定（測色）して記録した。試験した条件は50を超え、一つの条件の試作では約100枚のタイルを焼成。本番を想定し、大ロットでの生産試験も実施した。このようにして15,000枚を超える見本品を試作し、最終的な製造条件を得るに至った。

#### ■本生産を終えて

2010年に本生産実施が決まり、再び現地にて色合いを

測定し本生産の条件を確認した。この結果をもとに三つの条件で焼成したタイルをブレンドして使用することが決まり、コーナー用のタイルも、手作業工程を交え生産することになった。

本生産では、2010年年末から2011年年始にかけて、約50万枚のタイルを焼成。わずか2週間の生産期間ではあったが、2003年に試作を開始してからようやく7年を経てたどり着く結果となった。

#### 【生産と納材の流れ】

事業主：東日本旅客鉄道㈱  
 設計：東日本旅客鉄道㈱、東京工事事務所・東京電気システム開発工事事務所東京駅丸の内駅舎保存・復原設計共同企業体（㈱ジェイアール東日本建築設計事務所・ジェイアール東日本コンサルタンツ㈱）  
 監理：東日本旅客鉄道㈱ 東京工事事務所・東京電気システム開発工事事務所  
 ㈱ジェイアール東日本建築設計事務所  
 施工：東京駅丸の内駅舎保存・復原工事共同企業体（鹿島・清水 鉄建 建設共同企業体）  
 タイル施工：不二窯業㈱  
 タイル販売：㈱ダイナワン  
 タイル製造：㈱LIXIL、㈱アカイタイル（協力工場）

#### 【創建時 建築概要】

竣工：大正3年 構造：鉄骨煉瓦造  
 <煉瓦製造会社>  
 躯体煉瓦：日本煉瓦会社  
 化粧煉瓦：品川白煉瓦㈱、鳥居陶器製造所など5社  
 <使用量>  
 躯体煉瓦：833万個 化粧煉瓦：94万個



化粧煉瓦外壁の見上げ（3階部分）



色合いのばらつきを再現した化粧煉瓦（3階部分）

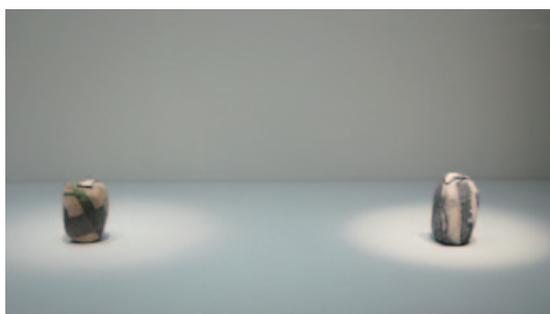


東京駅丸の内駅舎 正面玄関

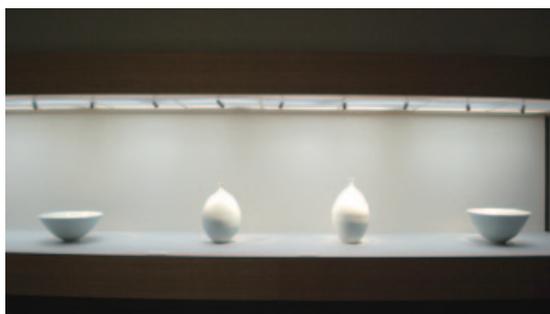
## 工芸とアートとタイルの狭間を考える—— 東京都近代美術館 工芸館「現代の座標—工芸をめぐる 11 の思考」 展から

現在、東京都近代美術館 工芸館（東京都千代田区北の丸公園）で開催中の「現代の座標—工芸をめぐる 11 の思考」展では、現代工芸で名のある大家の作品をはじめ国際的に活躍する作家の作品が展観され、見ごたえのある展示空間を楽しむことができるが、なぜこの 11 人の作家が「現代の座標」なのかは、一般にはわかりにくいのも確かだろう。

展覧会オープン前日の記者発表会では、そのことにふれた質疑応答が行なわれ、工芸と美術、さらには工芸を支える地場産業との関係を考えさせられ、とても興味深いものだった。展覧会の見ごたえのあるシーンとともに、その概要を紹介する。



楽 吉左衛門《焼貴茶入》2012 年



八木明《青白磁縞篇壺》《青白磁縞大鉢》2012 年



黒田泰蔵《Untitled Untitled》2012 年

### 展覧会の主旨

日本の近代工芸は時代に即した発展を成し遂げ、国際的な注目も集めてきました。特に近年では、工芸と美術の動向を踏まえながら工芸と個々の造形に対する思考をひたすら深め、現代の造形として革新に意欲を示す作家らが活躍しています。彼らは、現代人の感性によって、工芸の伝統のみならず作品の構造や装飾性、物質性といった特質を再認識し、個別の意識を明快にして独自の表現を見出すべく努めてきました。

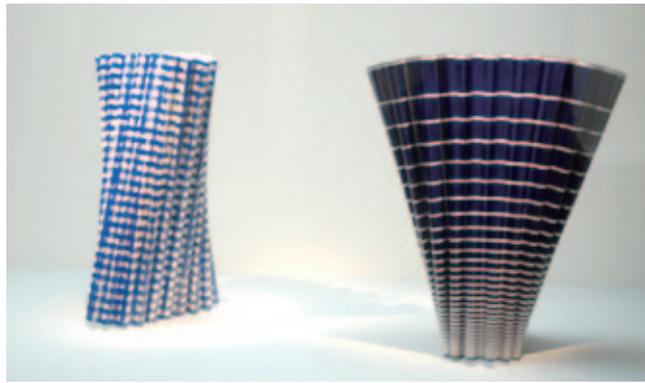
今日の日本工芸を代表する森口邦彦や楽吉左衛門らは、友禅や樂焼といった伝統の手法と素材表現に新たな創意を見出して現代的な伝統を築き上げています。また栗木達介や八木明、田中信行らは、既定の工芸の認識や造形の手法を再構築して新たな可能性を切り拓いてきました。いずれも、国内外での精力的な制作発表や主要美術館へ

の作品収蔵などとおして、国際的にも認知されています。その芸術は、素材や表現を異にしながら、日本工芸に清新な造形手法を提示するとともに、新たな座標を構築するものとして広く国際的標準の評価を受けています。

本展では、そうした、現代の日本工芸をリードしてきた作家らと今日もっとも独創的に制作活動を繰り返している気鋭の作家らとをあわせ、特に国際的にも注目される 11 人を取り上げます。各々の造形思考を明快にして個性的な創作とした作品約 90 点で構成し、現代の工芸を検証しつつ工芸の将来を展望します。（パンフレットより）

### 「現代の座標—工芸をめぐる 11 の思考」とは？

展覧会開催の前日 9 月 14 日に報道関係向け説明会 & 内覧会が開催され、東京都近代美術館 館長の賀茂川 幸夫氏ならびに主任研究員の諸橋 正則氏から展覧会の趣旨説明がなされ、記者との質疑応答が行なわれた。「なぜこの



武山直樹《ときよ》《ゆめがたり》2012年

11人なのか」をめぐっては記者との活発な意見交換があり、タイルもある種の工芸品であると考え、とても参考になる議論でもあった。その概要をお伝えする。

始めに賀茂川館長から、開催趣旨が述べられた。今回は現在、海外で活躍し、その作品が海外で高く評価されている作家を集めた。2007年には大英博物館で日本の近代工芸が好評を博し、今年もフィレンツェで文化庁の支援による日本の工芸展が行なわれ高い評価を得たように、日本の現代工芸が海外で評価を受ける背景は何か。それを窺い知ることのできる展覧会として本展を企画した。現代工芸の革新性には二つの視点がある。一つは伝統的な手法や素材表現をふまえたうえで独自の創作をめざすもの、もう一つは伝統技法に依拠することなく新たな表現方法を追求して核心に迫ろうとするもの。そうしたバックグラウンドをもって制作に取り組む70代のベテランから30代の若手まで集めた。こうした作品の魅力を日本の国内でも親しんでいただきたい、という趣旨であった。

諸山氏からは企画の意図について解説があった。日本の工芸は海外でも注目を浴びているし、国内において伝統工芸の古典をふまえながら新しい創造に向かう作家もあれば、常に革新に立ち向かう作家もいる。その中でいろいろな注目される作家たちが登場し、特に近年は個人としての強いパフォーマンスが明快になってきた。現実

に海外に作品発表の場を広げて、海外のキュレーターやディーラーからも注目されている作家も多い。そうした作家を選抜し、日本国内においても国際的に活躍する作家をもっとアピールしようと考えた。11人の作家選択の基準は、作品は日本的であるけれども創作自体はグローバルであるという視点から、国内外で活躍するベテランをはじめ、海外に活動の場をもつ若手まで、いろいろな年代、素材をフォローした。こうした試みが日本国内の工芸を見つめ直すきっかけになれば嬉しい、と。

### 工芸と美術、そして地場産業の狭間を考える

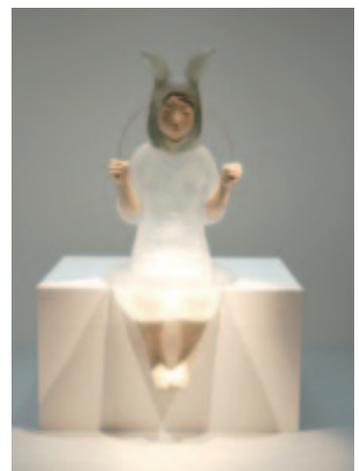
質疑応答ではある記者から質問が出た。多くの工芸作家は伝統工芸の産業構造と結びついている。陶芸にしろ、友禅や漆工芸にしろ、地場の伝統工芸産業が衰退したから、そのアンチテーゼとして工芸作家は海外へ進出した。日本の地場産業が長期低落傾向にあるなかで、その産業構造が守れるかという時に、ごく限られた作家だけが海外に出て行って活躍する。それは現代工芸の視座ということから言えば、逆に危険な感じもする。かつて工芸美術館が各地にできたのは、伝統工芸の盤石な産業構造があって、その上に成り立ってきたからだ。そういう状況が崩れて、海外に出て行かなければ成立し得なくなった日本の工芸の負の要素（地場産業）をどう考えるのか。



右より賀茂川館長、諸橋氏



栗木達介《組帯壺 法師》1996年



小田橋昌代《the entrance to the inner world I》2011年（吹きガラス）



森口邦彦《友禅訪問着 位相色紙文》2006年

そういう大きな視座があってもいいのではないかと、という意見であった。

それに対して諸山氏は、伝統工芸の地場産業を海外にもっていくプロジェクトも行なわれており、海外でも評判はいい。ただ、現時点ではそれが国内の地場産業にフィードバックされないという現実があるのも確か。私たちの身近にある工芸や地場産業をどう考えるのか、この展覧会がそれを考えるきっかけになればいい。今回は、美術館のキュレーターが担える部分として「現代工芸の視座」というテーマで企画したもので、地場産業についてはもちろん私たちも産業デザイン、プロダクトデザインに着目して、世界で活躍するデザイナーを取り上げる展覧会も考えている、と応えられた。

また、工芸美術と地場産業をどのように整合性を図るか、難しい面があるが、あくまで美術館の役割としては工芸美術としてのアプローチであり、産業振興や伝統工芸の再興というのはまた別のアプローチが必要なのでは



畠山耕治《六つの面》2008年

ないか、と館長は述べられた。

今回の出品作品は、新作・旧作にとらわれずにご自身の創作のバックグラウンドがよく表わされているものを作家に依頼し、結果的に新作も多く出品されたという。全体的に装飾性を抑えたシンプルな造形の作品が多く、煉瓦造の落ち着いた展示空間に静謐の表情を湛えながら存在感を示す現代工芸の粋を鑑賞することも、意義深いことと感じられた。

■展覧会概要

会場 東京国立近代美術館 工芸館

会期 2012年12月2日(日)まで

開館時間 10:00-17:00 (入館は閉館30分前まで)

休館日 月曜日

観覧料 一般500円(350円) 大学生300円(150円)

高校生以下および18歳未満、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料。

※それぞれ入館の際、学生証、運転免許証等の年齢のわかるもの、障害者手帳をご提示ください。

## 東京国立近代美術館 工芸館の煉瓦建築

工芸館の建物は、旧近衛師団司令部庁舎を保存活用したものの。この建物は、明治43(1910)年3月、陸軍技師田村鎮(やすし)の設計により、近衛師団司令部庁舎として建築された。2階建煉瓦造で、正面中央の玄関部に小さな八角形の塔屋をのせ、両翼部に張り出しがある簡素なゴシック様式の建物となっている。丸の内や霞ヶ関の明治洋風煉瓦造の建物が急速に消滅していくなかで、官庁建築の旧規をよく残しており、日本人技術者が設計した現存する数少ない遺構として重要な文化財となっている。

昭和47(1972)年10月に外壁、玄関および階段ホールが重要文化財に指定され、翌年から保存活用工事が行われ、内側に新たに鉄筋コンクリートの構造体を設け、煉瓦壁体はあたたかも外装タイルのように扱われている。屋根は震災後の棧瓦葺から建設当初のスレート葺きに復元された。中央の階段回りとホールの部分は、当時の姿を残しているといわれ、東側に設置された和室も含め展示室は、東京国立近代美術館本館の設計者である谷口吉郎によって設計された。(資料より)



東京国立近代美術館工芸館 正面外観



正面見上げ